

夢枕獭

蒼獣鬼

TOKUMA NOVELS

闇狩り師シリーズ

《異神篇》





TOKUMA NOVELS

夢枕 獏

蒼獣鬼《異神篇》

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

Baku Yumemakura ©1986

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 吉川和利〉

ISBN4-19-153221-9

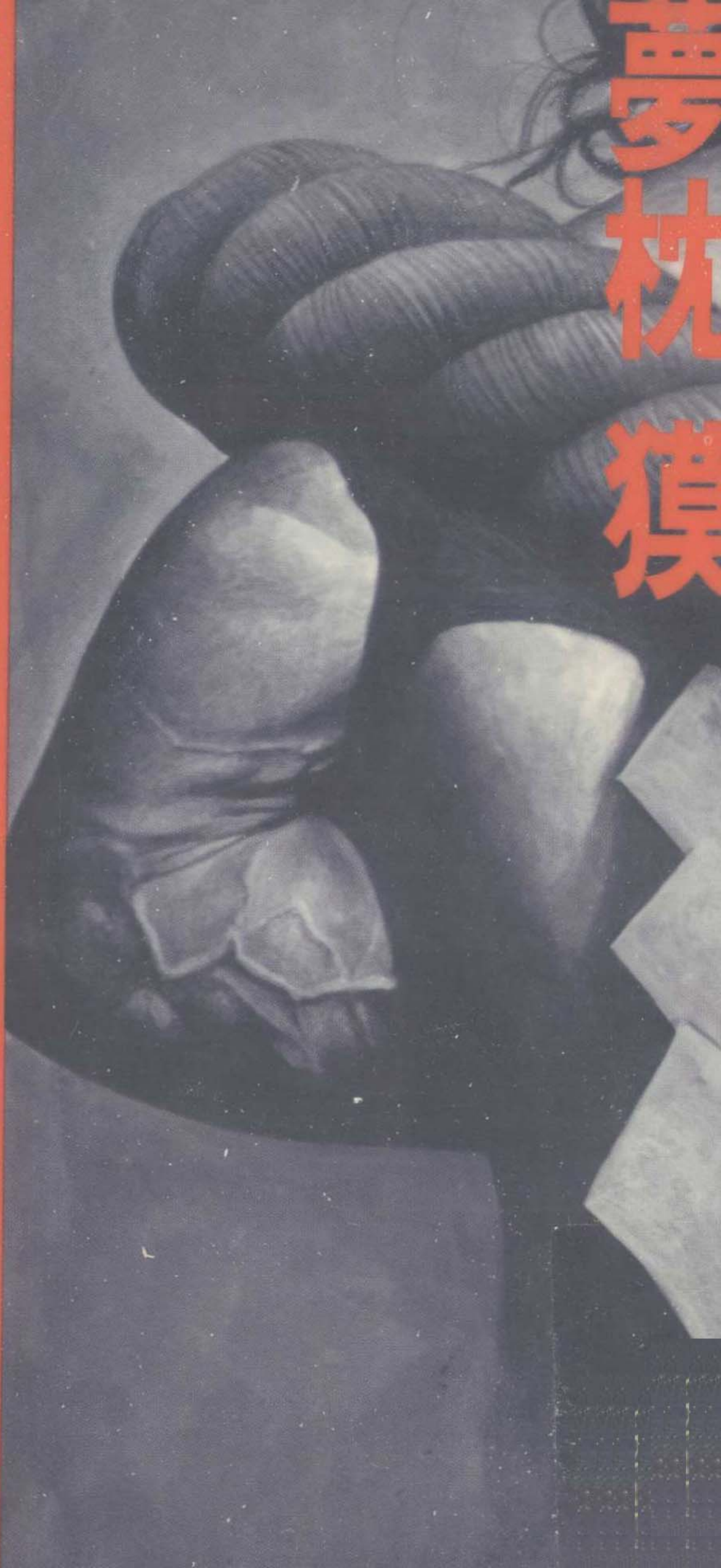
夢枕獯

蒼獣鬼

OKUMA NOVELS

闇狩り師シリーズ

《異神篇》



I313. 45
J8796-2

21-9 C0293 ¥680E 定価=680円

蒼獣鬼そうじゆうき《異神篇いしんへん》、夢枕獏ゆめまくらばく

超過密スケジュールのあいまを縫い、大自然と接すること、その活力を取り戻すという夢枕獏だが、過日、十年ぶりにヒマラヤを訪れた。マナスル山中で雪崩に遭い、生と死がとなり合わせる自然界の猛威を改ためて体験した氏が綿々と紡ぎ出す物語世界は、更に奥行きを広げたようだ。



TOKUMA NOVELS



闇狩り師シリーズ

蒼獣鬼《異神篇》 夢枕獏



徳間書店

TOKUMA NOVELS

H30663

目次

一章

異^い

人^{じん}

9

二章

邪^{まが}

蛇^{なわ}

50

三章

魔^ま

人^{じん}

90

四章

邪^{じゃ}

法^{ほう}

140

終章

185

あとがき

214

本文挿画・天野喜孝

蒼獸鬼《妄靈篇》あらすじ

仙道の師である真壁雲斎まかべうんさいに呼び出され、小田原・風祭の円空山を訪ねた九十九乱蔵つくもらんぞうは、雲斎から、鳴神真人なるかみまことという少年に憑依したものを落としてほしいと依頼された。真人の姉磯村小百合いそむらさゆりに詳しい話を聞くため、乱蔵は、小百合との待ち合せ場所に出かけるが、そこで、数人のやくざに連れ去られようとしている小百合を目撃し、危いところを救出した。小百合は、「自分が真人の姉であり、鳴神素十かみそじゅうの娘だから、こういうことが起った」と言う。そして、真人には、自分が憎しみを抱いた相手を偶然の事故に遭遇させる能力があり、中には死んでしまった者さえいるというのだ。

一方、名古屋を中心に勢力を持つ暴力団・五門会の会長秋葉香太郎あきは きょうたろうは、鳴神素十の呪詛により、半ば、異形のものとなっていた。五門会は、五年前、秋葉組が他の組を吸収してできたものだが、最後まで抗争を続けていた玄武会の会長を呪い殺してくれるよう、秋葉が素十に依頼したのだった。しかし、その報酬の約束を無視したため、素十から呪われたのである。五門会幹部有住正勝ありすみ まさかつらは、小百合と真人を人質にとり、素十の呪詛を解こうとして、二人を追っていたのだ。鳴神素十は、いざなみ流陰陽師の家元の血筋で、「呪詛返し」の技では、いざなぎ流、いざなみ流両流派の中でも随一である。二十一歳の時に忽然と消息を断ち、現在は八十九歳のはずであった。

高野山の鬼門にあたる霊応山に「餓哭庵」を構える戸田幽岳とだゆうがくのもとに、苦蛇使いの道士加座間典かざまてん

善と山伏玄角げんかくが呼ばれた。幽岳は、戦前、戦中を通じて、近代日本における最大の神霊能力者といわれている。「真霊大全」「真霊王国」を著して真霊協会を率い、その影響力は時の政権を握るかと思われるほどだったが、政府の弾圧にあい、毒殺されたとの噂があった。現在も生きているなら、年齢は一三十歳から一四十歳のはずだ。二人は半信半疑で「餓哭庵」を訪れ、老女墨子すみこの案内で幽岳と対面するが、幽岳は何者かに呪法をかけられ、その下半身は無残に変貌していた。その呪いはらうために、典善と玄角が呼ばれたのだ。これまでも、術使いの青円せいえん、螺王らおう、九重丸ここのえまる、弁覺べんがくらが同じ様に呼ばれ、命を落としていた。幽岳を守るため、四人の人面を使って行なわれた四天降魔法の秘儀を覗き見た典善と玄角は、凄まじい瘴氣に圧倒され、呪いの強さに驚嘆するばかりだった。幽岳もまた、鳴神素十の行方を追っていた。墓子ひきこ、餓虫がむし、黒蠅くろはえといった異形の者を使って五門会に近づいていたが、乱蔵が鳴神姉弟をかくまったホテルをつきとめ、餓哭庵に拉致したのだ。乱蔵は、素十が棲みついていという破れ寺を訪ね、素十から意外なことを聞かされる。——真人のあれには幽岳が関係している。しかも、真人は幽岳の血をひいているのだという。そこまで話を聞いた時、二人は黒蠅の襲撃を受け、格闘の末に黒蠅を倒すが、折から押し寄せてきた五門会の男たちに包囲されてしまった。幻術を駆使してその場を逃れ、素十は、真人の母初江はつえを入院させている病院へ、そして乱蔵は、姉弟をかくまっていたホテルへ行くため、名古屋をめざした。その途上、素十は、幽岳の待つ霊応山に一緒に行こうと言い残して、車から跳び降り、姿を消したのだった。

愛し愛しと哭きながら
哀しき肉を啖えども
なお わが鬼はやまず

岩村賢治詩集『蒼黒いけもの』より

1

闇の中で、小さく金属音が鳴った。

細くドアが開いた。開いたその場所でドアの動きが止まる。

廊下の灯りが、その部屋に入り込んでくる。

何者かが、部屋の気配をうかがっているらしい。

再びドアが動き始めた。

ドアが押し開けられた。

しかし、廊下の灯りは、ドアが細く開いていた時と同じで、ほとんど部屋の中には入ってこない。何かが開いた入口をいっばいに塞いでいるのである。

いや、何か、ではない。

それは、人であった。

人間がそこに立っているため、入口のほとんどが塞がれて、外からの灯りが入ってこないのである。

男である。

常人とは、桁^{けた}違いの肉の量を有した男であった。

ゆっくりと、その男が部屋の中に足を踏み入れてき

た。

むろんのこと、男の肉体は部屋より小さいのに、それだけで、その部屋がいっぱいになったような感じがする。男が入った分だけ、大量の空気が部屋から逃げてに違いない。

その逃げた空気の量は、男の肉体が有している実質的な体積よりも、倍近くは多そうであった。

それは、眼に見えぬ圧力を、周囲の空間に対して、男の肉体が放っているからである。実際よりも、倍近くも大きく見える。

九十九乱蔵であった。

乱蔵は、部屋に足を踏み入れた所で、立ち止まっていた。

一時間ほど前に、乱蔵は、鳴神素十なるかみそじゅうと分かれている。

諏訪原寺からこちらへ向かう途中で、同乗していた鳴神素十が、走っているランドクルーザーから飛び降りたのである。

——鳴神素十。

陰陽道の流派、いざなみ流の呪法すほうを極めた異相の老人である。

年齢、八十九歳。

鳴神真人なるかみまことの父親である。

今回の仕事は、その鳴神真人に憑よいているものを落とすことにあった。それを、乱蔵は、小田原の真壁雲齋まかべうんさいから依頼されたのである。真人の姉の磯村小百合いそむらさきゆりが雲齋に依頼し、雲齋がその仕事を乱蔵にまわしたのである。

小百合も、真人も、奇妙な男たちにつけねらわれていた。乱蔵は、拉致らちされそうになった小百合を深夜の路上で救い、また、何者かに襲われかけた真人を夜の公園で救っている。

ふたりを襲ったのは、名古屋を中心に勢力を持っている五門会の人間たちであった。

真人の時には、真人を襲った男の何人かが、眼に見

えぬ力によって手ひどい目にあわされている。小林という男は、その目に見えぬ力により、跳ね飛ばされて悶絶している。もうひとりの斎藤という男は、両脚を膝から前に折られ、浮きあがってきたフル回転するバイクの後輪で、顔面の肉を削りとられている。

乱蔵自身も、その眼に見えぬパワーと正面からぶつかっている。

その眼に見えぬパワーが、美しい少女のような少年、鳴神真人に憑ついているものなのであった。

しかし、何故、真人と小百合が、五門会の人間にねらわれているのか。

乱蔵は、五門会の会長、秋葉香太郎あきは きょうたろうの屋敷を訪れ、そこで奇怪なものを見た。無残に異形いぎようのものに変貌した秋葉香太郎の姿である。

鳴神素十の呪詛すそを受けて、そのような姿になってしまったのだという。

秋葉は、五年前、名古屋を制圧し、五門会を設立す

るおり、鳴神素十の呪詛の助けを借りている。ところが、秋葉は、鳴神素十に対して、報酬ほうしゅうを与えるのを拒否した。

その恨みで、鳴神素十が、秋葉に呪詛をかけているのだと、五門会、秋葉組の若頭である有住ありずみは言った。

だから、五門会は、鳴神素十の娘と息子である、小百合と真人を捕え、ふたりを囹おとりにして鳴神素十と話をつけようとしていたのである。話をつける——つまり、鳴神素十を殺すことである。

乱蔵は、鳴神素十のいるという諏訪原寺へ向かい、そこで、ついに鳴神素十と対峙した。

そこで、乱蔵は、鳴神素十から奇怪な話を聴かされることになった。

“戸田幽岳とだゆうがくは生きておるぞ”

と、鳴神素十は乱蔵に言った。

戸田幽岳——戦前、戦中を通じて、近代日本における神霊界の最大の巨人であると言われている。一時期

は、その力が、日本の軍部にまで深く及び、日本の政権を握るかどうかと言われたことまでであったという。

その戸田幽岳が、鳴神真人の憑きものに関係があるのだと、鳴神素十は言った。

しかも、真人に憑いているものは、そこらの雑霊の式神ではなく、戸田幽岳が造った式神であるという。

「わざわざ真人の母親の生霊を式神として使っておるのだ」

と、鳴神素十は言った。

その会話の途中で、乱蔵と鳴神は、黒蠅くろはえに襲われた。

乱蔵と鳴神は、その黒蠅を倒し、諏訪原寺を囲んだ五門会の包囲を突破して、ランドクルーザーでそこを後にしたのだった。

部屋に踏み込んだ乱蔵は、ゆっくりと後ろ手にドアを閉めた。

再び、部屋を闇が支配した。

しかし、真の闇ではない。薄い灯りがある。二重に

閉めた窓のカーテンの布地を通して、外の灯りが入り込んでくるのである。

まだ、昼であった。

それなのに、二重にカーテンが閉まっているのである。

鳴神真人と、磯村小百合がいるはずの、ホテルのツインの部屋である。ふたりには、部屋を出るなど言い残してあった。

——しかし。

ここまで来る途中で、何度かホテルに電話を入れたが、誰も受話器を取る者はなかった。

「おまえの、息子、真人、今頃は、餓哭がく庵だ」

黒蠅が鳴神に残した言葉が、乱蔵の脳裏にまだ残っている。

部屋に、ふたりの気配はなかった。

だが、ふたりではなく、別の気配ならば、それは、まぎれもなくその部屋に存在していた。

それが、乱蔵が細くドアを開けた理由であり、今、灯りも点けずにそこに立ち止まっている理由であった。

それは、ひどく艶めかしい気配であった。

淫靡、と言ってもいい。

発情した牝の匂いが、部屋の大気の中に溶けているようであった。

乱蔵の左肩に黒いものがわだかまっていた。

その、漆黒のわだかまりの中心に、かつ、と、双つのみどり色の炎が点った。

金緑色をした、獣の双眸であった。

乱蔵がシャモンと呼んでいる猫が、それまでつむっていた眼を開いたのである。

——シャモン。

漢字では沙門と書く。

仏教で言う修行僧をこの名で呼ぶ。

シャモンは、霊喰い専門の猫である。しかし、ただの霊喰いではない。歳を経た猫又である。

しゃーっ

細く、シャモンが喉を鳴らした。

小さく口が開いて、白い尖った歯と、赤い舌が覗いた。

部屋の奥に、ふたつのベッドが並んでいる。

そのうちの一方は、空であった。

しかし、もう一方のベッドの毛布が、大きく盛りあがっていた。

その毛布の下に、何かがいるのである。

りん。

と、澄んだ音が響いた。

黒く盛りあがったベッドの上からである。

りん。

りん。

小さな鈴に似た音が、部屋の暗がり響く。

その音が乱蔵の耳を打つ。

何か、耳から、媚薬ひやくやくを注ぎ込まれるような音であった。

音がふるわせた鼓膜こまくから、脳へ、直接に甘い痺れしびが遣い込んでくるようであった。

常人なら、思わずつうつと背骨に沿った背筋の毛をそば立て、股間のものを立ちあがらせていたろう。

しかし、乱蔵の唇に浮いたのは、野太い笑みであった。

「淫鈴か——」

低い声でつぶやいた。

その声が部屋に響くと、鈴の音が止んだ。

かわりに、小さな忍び笑いが、毛布の下から響いてきた。

女の笑い声であった。

自らの指で、秘肉をなぶりながら発している笑い声のようであった。

「効かぬかえ？」

その声が言った。

淫蕩いんどうなその声の色が、呼気となって闇の中に見えるようであった。

「ここにいたふたりはどうした？」

乱蔵が言った。

「さあて——」

毛布の下から声がする。

部屋の淫気がさらに強まっている。

「靈応山りやうおうざんか？」

乱蔵が言うのと、女の笑い声がやんだ。

「どこで聴いた、九十九乱蔵？」

「ついさっきだよ」

乱蔵は言ってから、ベッドの上の盛りあがりに向けて、軽く気を解き放った。

「初対面のはずだな」

乱蔵が言った。

女の声は、これまで聴き覚えのないものであった。

乱蔵の知らない女が、乱蔵の名前を知っている。それをどこで聴いたのかと乱蔵は言外に問うたのであった。

「おぬしのことを聴かされたのは、小百合と、真人からよ——」

女の声が言う。

「何と聴いた」

「強い男がいると聴いた。その男がいずれ助けに来ると——」

「ほう」

「五門会の連中を、あっさりのしたそうね」

「ああ」

乱蔵はうなずいた。

「しかし、なぜ、独りだけそこに残った？」

「どれほどのものか、九十九乱蔵を、この眼で見ようと思つてね」

「見たらどうだ。毛布をかぶっていては見えないに」

「こわくてこわくて——」

それで毛布をかぶっているのだと女の声は言った。

「わずかでもわかるよ。あんたの気配が、みっしりとこの部屋に満ちている。わたしは、その気配だけで押し潰されそうさ」

「窓を開けて、外の空気を入れてやろうか」

「それにはおよばないよ。わたしは、あんたに話があつてね」

「話？」

「うちで、仕事をしてみないかえ」

「仕事？」

「霊応山まで耳に入っているのなら、戸田幽岳の名も聴きおよんでいよう」

「聴いたよ。まだ生きているらしいという噂をな」

「噂だけではないぞ」

「——」